

興隆期の法持寺について

川 口 高 風

はじめに

法持寺（名古屋市熱田区白鳥）は山号を白鳥山といい、天長年間（八二四―三四）に弘法大師空海が熱田神宮へ参籠したおり、日本武尊の御懿徳を慕い、私に一小祠を建立して祀った寺院である。本尊延命地藏菩薩を自ら彫り、諸堂の額字などを自筆したといわれる。

その後、文明年中（一四六九―八七）に円通寺（名古屋市熱田区神宮）二世明谷義光によって曹洞宗に再興され、熱田神宮大宮司千秋家代々の菩提所となった。再興年次については応永年中（一三九四―一四二八）、宝徳元年（一四

興隆期の法持寺について（川口）

四九）の説もある。

このような由緒ある法持寺が、曹洞宗になる以前や以後の草創期についてはすでに明らかにしたので、本稿では、三世月洲瑞香より十四世義山淳孝の歴住が教線を拡張し門葉を加えていった興隆期を考察してみたい。なお、八世月峰慶吞は別稿^②でとりあげたので、ここでは省略する。

〔1〕 拙稿「誓海義本と明谷義光の伝記」（平成十六年三月

「愛知学院大学禅研究所紀要」第三十二号）、「草創期の法持寺について」（平成十七年二月「愛知学院大学教養部紀要」第五十二巻第三号）で明らかにした。

〔2〕 拙稿「裁断橋擬宝珠銘を書いた月峰慶吞」（平成十七年四月『竹貫元勝博士還暦記念論集』）所収。

興隆期の法持寺について（川口）

興隆期の法持寺歴住

三世 月洲瑞香

二世維玄義中の後住に月洲瑞香が就いた。その年次は不詳であるが、月洲は大永年中（一五二一—二七）に香林宗萇が清須に開創した光明院（現在、名古屋市中村区名駅）の開山に勧請された。光明院は慶長遷府の際、現在地へ移転しており、十一代大通覚道が宝暦二年（一七五二）九月に常樂寺（稲沢市日下部東町）より光明院へ転住した後、明和九年（一七七二）二月に法持寺十五世督宗淳董を伝法第一祖に勧請して法地再興した。なお、法地再興開山には大鏡全牛が迎えられ、大通覚道は法地開基となった。⁽¹⁾

月洲は天文年中（一五三二—一五四）に、大悲山香樹院（現在、法輪山大運寺）を開闢した。その経緯は明らかでないが、天文十年（一五四一）に創建された法持寺塔頭の太虚院住持であった香山漬公が建立しており、後に吉田清左衛門が中興開基となって法持寺十四世義山淳孝を法地開山に迎えている。なお、天明五年（一七八五）十月二十四日には

現在の山号、寺号に改められた。⁽³⁾

さらに月洲は洞仙寺（名古屋市中区伊勢山）の法地開山にもなっている。洞仙寺の草創は尾張守護斯波義健の嫡男千代松丸（永正二年（一五〇五）七月六日没）が出家して玉泉玄珠と称した。その玉泉が文明十二年（一四八〇）に一字を建立して玉泉庵と称したが、明応年間（一四九二—一五〇二）に無本寺の寺院は許されない触が出たことにより、二代喜翁秀頓は法持寺に依頼しその末寺となっている。当時の法持寺住持が月洲であったところから開山に迎えたものと思われる。寛文七年（一六七七）には現在の瑞雲山洞仙寺と改められたが、平僧地であったところから蜜伝心宗（安永九年（一七八〇）四月十五日示寂）が法地となして庫院を建立した。⁽⁴⁾

このように月洲は光明院、大運寺、洞仙寺に迎えられて開山となっているが、法持寺における行歴は明らかにならない。光明院の位牌には、

（表）勅賜義伝禪師法持三世當院開山月洲香大和尚

（裏）天文十三^甲辰 四月廿三日

とあり、天文十三年（一五四四）四月二十三日に示寂した。

成福寺（名古屋市北区瑠璃光町）蔵「法持寺世代示寂年月日」には天文三年（一五三四）示寂となっているが、これは（十）が抜けたものと思われる。

光明院の「覚」によれば、

愛知郡熱田法持寺末

同郡広井村

禅曹洞宗

光明院

開山 月洲和尚

一年月相知不申

誰和尚嗣法弟子之儀相知不申
本寺法持寺より當寺え勸請

一天文十三辰年四月

右法持寺にて病死

とあり、法持寺において病気で示寂した。光明院の位牌によれば義伝禪師号を勅賜されている。⁽⁶⁾

長楽寺（名古屋市中南区呼続）は二世義山華嚴、三世義伝

月洲である。二世義山の位牌には、

（表）前永平當寺二世義山華嚴大和尚

（裏）大永七丁亥天十二月十九日示寂

世寿九十

とあり、大永七年（一五二七）に示寂している。三世義伝

興隆期の法持寺について（川口）

の位牌は存在しないため詳しいことは明らかにならないが、義伝月洲と月洲瑞香は同時代のため同一人物と考えられる。勅賜禪師号の義伝と号の月洲が合併して号諱になったように思われるが、それがいつ頃であったか、また、異人であるかなどの詳しいことは明らかでない。

- (1) 光明院の「由緒書」（名古屋市鶴舞中央図書館蔵『名古屋神社記録集』三十二）、『名古屋市史』社寺編（大正四年七月 名古屋市役所）五八四頁の「光明院」などによる。
- (2) 法持寺塔頭太虚院が、天文十年（一五四一）に創建されたことは『名古屋市史』社寺編六六四頁の「法持寺」でいう。
- (3) 『御城下臨濟曹洞寺院由緒帳』（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）一一二頁にある元禄七年五月の香樹院「書上之覚」による。
- (4) 昭和十一年六月調査の「曹洞宗寺籍簿」の洞仙寺由緒や『名古屋市史』社寺編六四五頁の「洞仙寺」による。
- (5) 光明院の「覚」は『名古屋市史』社寺編三十一に所収している。
- (6) 月洲瑞香が義伝禪師を勅賜されていることは栗山泰宣『総持寺史』（昭和十三年三月 大本山総持寺）二六七頁にもあげている。

興隆期の法持寺について（川口）

四世 仙英良菊

仙英良菊は天文十四年（二五四五）に延命寺（愛知県海部郡甚目寺町）を中興し曹洞宗に改めた。延命寺の前身は『類聚国史』巻一八〇に、

貞觀十四年三月二十八日戊戌。尾張国海部郡清林寺
列_二之定額_一。

とある清林寺のことで、創建当時は天台宗であった。後に真言宗となり十二僧坊のある大伽藍であった。しかし、次に衰微し十一坊が廃絶して延命坊のみが残った。それを仙英が開山となり、清林寺の寺号を青林と改めて山号とし、寺号を延命寺と改めて曹洞宗に改宗した。久寿年中（一一五四―一五六）に源頼政が関東下向の時、病に罹って苦しんだ。その時、清林寺の本尊延命地藏菩薩に祈誓したところ一昼夜で回復したため、その報謝として本郷、長牧の二村を寄進したといわれる。

延命寺の仙英の位牌には、

（表） 勅住永平法持四世當寺開山僊英良菊大和尚禪師

（裏） 當寺古ハ清林寺頼政公比ヨリ呼延命ト古伝ニ有

天保十一年子 正月新造

現廿一世頑童隣叟以自金調

とあり、天保十一年（一八四〇）正月に二十一世徳翁頑童が新しく造立したものである。裏の書入れによれば、頼政の頃から延命寺と呼称されることになったとの古伝をいうため、仙英が曹洞宗として中興する以前に延命寺と改称していたものとも考えられる。しかし、詳しいことは明らかでない。

弘治元年（一五五五）には、法持寺塔頭の洗月院が創建された^③。これは仙英の法持寺住持時代と思われる。また、仙英は、弘治三年（一五五七）に東光寺（愛知県海部郡大治町）を開創した^④。東光寺の過去帳によれば、仙英は同年八月十日に示寂しているため、どのような経緯で開かれたかは明らかでない。なお、東光寺では諱が「舜菊」となっている。同寺所蔵の「昭和三十四年^{己亥}年一月^{ヨリ}當寺世代繰出表」によれば、

平僧仙翁鶴公首座 天文十三甲辰六月廿八日 四百十

六年

法持四世 當寺開山 仙英舜菊大和尚 弘治三^{丁巳}八月十日 四百〇

三年

平僧本州源公首座 天正十四丙戌七月廿二日 三百七

十四年

とあるところから、仙翁鶴公、本州源公らが開創に関係したものと考えられる。

その後、菜翁黙仙（一七一三—一八〇〇）が法地を開闢して開祖となり、二世には弟子の仏音寺（愛知県西春日井郡春日町）五世曇華泰秀が就いた。曇華が師の菜翁を法地開闢に勧請したものと考えられるが、その年次は明らかにならない。

このように、仙英は延命寺と東光寺の草創開山となっている。

- (1) 『類聚国史』卷一八〇（平成十二年三月『新訂増補国史大系第六卷 類聚国史 後篇』吉川弘文館）二六七頁。
- (2) 『甚目寺町史』（昭和五十三年三月 愛知県海部郡甚目寺町）五〇七、八頁に由緒沿革が記されている。
- (3) 安藤準成（名古屋金城寺院宝鑑）（大正四年四月 名古屋朝日新聞社）二五六頁、『名古屋市史』社寺編（大正四年七月 名古屋市役所）六六六頁にいう。
- (4) 『尾張洵行記』（四）の東光寺項（名古屋叢書統編）第七

興隆期の法持寺について（川口）

卷 昭和四十三年九月 名古屋市教育局教育委員会 二二二頁に
よる。

五世 春沢祖豊

春沢祖豊が法持寺に住持した年次は明らかにならない。四世仙英の示寂した弘治三年（一五五七）八月十日以後とすれば、住持期間中の永禄元年（一五五八）には法持寺塔頭の高岩院、天正元年（一五七三）には同じく塔頭の梅萼院が創建されている。⁽¹⁾

永禄三年（一五六〇）五月十九日には、織田信長が今川義元を尾張田楽狭間に奇襲して敗死させた桶狭間の戦いが起きた。この戦に向う途中、信長は熱田神宮へ立寄り必勝を祈願したが、法持寺にも立寄って祈願したといひ伝えられている。

春沢は福重寺開基浅井右近善長の末葉で、天正以来代々医者を続けてきた浅井安親の子である。安親は善長寺（後の妙覚寺）の開基でもある。開山は子の致巖（致巖は勅賜号、文白元昌）で、春沢の兄にあたる。『張州雑志』巻第五

興隆期の法持寺について（川口）

十八「浅井杏庵」に所収する「浅井系図」は、次頁のようであり、春沢は法持寺塔頭の三笑軒の開山であった。又従兄弟には祖林がいる。「浅井系図」によれば、祖林は福重寺（名古屋市熱田区白鳥）に住持したことになっているが、福重寺歴住には該当者がおらず、法持寺七世の嫩桂祖林が該当するものかと思われる。

天正十三年（一五八五）九月の「春沢讓状控」が浅井家文書にある。それをあげれば、

ゆつり状

一貫三百文 畠一段 就于方丈 代々御わたし可在候、
三ツ一斗五升 田二段 宗吞江 在所大間 小作弥七
七斗七升 田一たん 宗吞江 在所大間 小作弥一
此内いる二百文在之

天正十三年乙酉九月吉日

春沢判

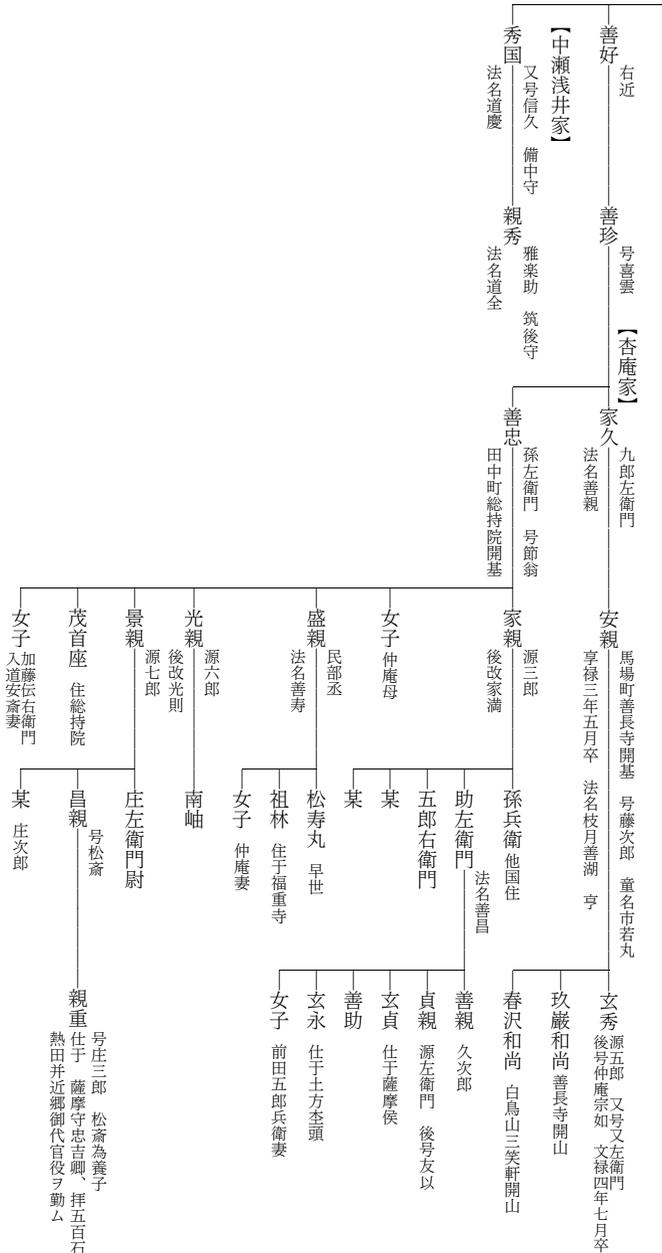
宗吞参

三ツ一斗 田二たん 在所玉井小作彦一 小太郎むこ也 祖林へ
三笑軒 祖林江 四百文 畠 常喜為_二修造_一就_レ之
八斗 田一段 是ハ祖林出世之時指合 又ハ置銭

是ハことハり多キ也

祖林参 天正十三年乙酉九月吉日 春沢判
七斗 田一段 中横田在所也まかなひすかの内 四斗五升 小作太郎助在所 林芸江
馬場ノヤブ一所 林芸江
林芸参 天正十三年乙酉九月吉日 春沢判
八斗 田一段 大間 祖易江
祖易参 天正十三年乙酉九月吉日 春沢判
一貫五十文 畠一段 在所だんぶの西 善長寺江就之
善長寺参 天正十三年乙酉九月吉日 春沢判
七百文 畠一段 カナ地藏前在所 祖天ニ出之
祖天参 天正十三年乙酉九月吉日 春沢判^②
とあり、春沢は法持寺と三笑軒の住持を讓っている。住持の方丈は法持寺七世大洋宗吞のことで、一貫三百文、畠一段は代々の住持が継承した財産と考えられる。また、宗吞へ三ツ一斗五升、田二段、七斗七升、田一段も讓っている。その他、三笑軒の祖林（嫩桂祖林）、林芸（不詳）、祖易（梅屋寺開基一光祖易か）、善長寺（現在の妙覚寺）、祖天（不詳）へも讓っている。この「春沢讓状控」により、春沢は法持寺、三笑軒を退隠した後、同十八年（一五九〇）三月

浅井元祖 号右近 応安年中卒 法名寛翁等公
 ●●善長
 右近善長ハ熱田福重寺開基也、今福重寺之地、則善長カ宅地也ト云事ハ、見神地記及寺院ノ部、



興隆期の法持寺について(川口)

興隆期の法持寺について(川口)

二十八日に示寂した。

春沢は金宝山林昌寺(明治二十五年に秋葉山宝昌寺と改称、愛知県海部郡大治町)の草創開山でもある。明治十七年一月に村上良音が記した「由緒書」によれば、

然ルニ寺草創開山ハ白鳥山五世春沢祖豊老師也天正年中織田家清洲ニ在城ノ頃信長公招請ニ応シ當山ヲ開拓シ法堂建立シ御本尊華嚴ノ釈尊脇士普賢文殊四天王等ヲ奉安置天下安全五穀成就武運長久火災消除ノ為メ當山鎮守ニ権現ヲ彼ノ尊像ニ奉勸請一矣

其後天正十八年ニ開祖遷化シ玉ヒ副住大洋宗吞和尚ハ法持寺エ移転シ信長公落城ノ砌り追々平院ト成ルコト凡二百五十余年間也^③

とあり、草創開山は春沢で、天正年中(一五七三—一九二)に織田信長が清須城に居住していた頃、法堂を建立して本尊、脇士、四天王などを奉安した。その後、天正十八年(一五九〇)に春沢が示寂し、副住職で二世の大洋宗吞は法持寺へ転住した。信長は天正十年(一五八二)六月二日に本能寺の変で自刃したため、寺は衰退し平僧地となったとある。しかし、宝昌寺の過去帳にある由緒書によれば、

愛知郡熱田法持寺末寺

禅宗曹洞派

海東郡花常村

金宝山林昌寺

平僧地

一、慶長三戊年入江夢庵開基と相見申候事夢庵何人等申儀不相知候

一、開山は本寺法持寺五代春沢和尚等相見申候事

一、境内広サ之儀此節尔等致シ候儀難申候尤除地等相

見申候事

一、花常村え引寺之境相知不申候慶長年右村に建立等

相見候事

二月

一、金宝山林昌寺境内壹反六畝式拾五步伊奈備前守殿御除地文化元甲子年七月廿七日本山(マツ)祿所正眼役寮

より改有之候

とあり、慶長三年(一五九八)に入江夢庵(入江基右衛門のこと)が開基となつて春沢を開山に迎えた^④とある。すでに春沢は示寂しているため、二世大洋宗吞かあるいは中興の一庭舟(寛文十年(一六七〇)四月二日示寂)が春沢を

勧請したのではなからうか。

文化元年（一八〇四）六月十二日には酒井惣吉、藤原利貞、母方の先祖である開基の夢庵の二六一年忌法要を営んでゐる^⑤。その時、酒井惣吉は春沢の位牌を再建しており、その位牌には、

（表） 前総持當寺開山春沢豊大和尚禪師

（裏） 天正十八庚寅年三月二十八日

酒井惣吉

再建之

とある。村上良音が明治二十九年一月に宝昌寺の秋葉三尺坊御分靈安置遙拝の道場を信徒に広告した「秋葉教会愛知本部」には開山春沢を「勅賜慈雲禪師」と称しており、慈雲禪師号を受けていたものと思われる。

（1） 塔頭の高岩院、梅尊院の創建については安藤準成『名古屋金城寺院宝鑑』（大正四年四月 名古屋朝日新聞社）三十一

六、四十九頁、『名古屋市史』社寺編（大正四年七月 名古屋市役所）六六四、六六六頁にいう。

（2） 鳥居和一「熱田浅井家資料」（平成十一年三月 「名古屋市博物館研究紀要」第二十二巻）十八頁。

興隆期の法持寺について（川口）

（3） 宝昌寺文書整理番号一七四の「由緒書」にある。

（4） 『大治町史』（昭和五十四年十二月 大治町役場）四六八頁の宝昌寺由緒、『愛知県歴史全集』寺院編（昭和六十一年七月 愛知県史誌出版協会）四九九頁の「秋葉山宝昌寺」にいう。

（5） 宝昌寺の過去帳の由緒書に、

文化元甲子年六月十二日當寺開基夢庵居士當年百六拾一年に相成酒井惣吉藤原利貞母方の先祖開基故寸志之法会等致供養其上當寺開基之儀本山不申及一家中并在所之人々承候處當寺之儀は入江甚右衛門法名夢庵等申人開基にて何之年開基等申事不知當寺も無住勝にて寺は村預りにも相成入江氏之子孫も追々衰微致委細之書付言伝等尔等致候事無御座付寺社方御役所にて御内々之御吟味頼候處書付被下候写左之通
とあり、明らかになる。

六世 大洋宗吞

浅井家文書の「春沢讓状控」によれば、天正十三年（一五八五）九月には法持寺住持を大洋宗吞に譲っていると思われる。したがって、春沢の示寂（天正十八年三月二十八

興隆期の法持寺について（川口）

日）以前に法持寺六世に就いたが、秋葉山宝昌寺文書では同寺二世大洋が春沢の示寂後に法持寺へ転住したという¹。

何れにしても住持となった年次は明らかにならないが、慶長三年（一五九八）十月二十一日に正眼寺（小牧市三ツ瀨）十三世天沢義恩より鐘を贈られている。その鐘銘をあげてみると、

尾州愛知郡熱田宮白鳥山宝持禪寺

厥當寺開山、示寂之後、百九年、鐘未成就、然処清須

灰原女房衆、為我父婦、寄進之法名者 華翁道春庵主

月照桂秀大姉 伏希以此功德、施主現世安穩、後生

善処、普及於一切、衆生皆具成仏道者必也

肝煎 田島大喜治部少輔並玄洞

右此鐘者雖被置於折津正眼寺隱居大洋當住嫩桂以方覺

義恩和尚當寺江被贈焉

于時慶長戊戌十月二十一日³

とあり、本来は正眼寺に安置されるところであったが、法持寺に鐘がなかったため清須の灰原氏の女房衆が父母の供養のために寄進したという。この鐘銘によれば、当時の大洋は隠居となっており、住持は七世嫩桂とある。しかし、

大洋は同十二年（一六〇七）七月二十八日より一年間、円通寺の代住として普濟寺へ輪住している。普濟寺の「前住牒」によれば、

尾州熱田 円通寺代住

誓海派前任當山法持六代大洋吞事 住

同十三戊申年

とあり、法持寺隱居ではなく六世住持となっている。なお、普濟寺のみならず円通寺にも輪住した⁴。

同十五年（一六一〇）十一月十三日には、松平忠吉の家臣である尾張衆五人の一人中村元勝が逝去した。元勝は弓で活躍した人で今川氏真、豊臣秀次、徳川家康らに仕えた⁵。その葬儀の導師を大洋が務めている。

元和二年（一六一六）には平田山極楽寺（現在、無量山長禅寺 名古屋市中川区富田町）を法地開基した。極楽寺は大伽藍であったと伝えられており、本尊は恵心僧都作の阿弥陀如来、脇立の観音、勢至両菩薩は慈覚大師の作といわれる。天正十年（一五八二）八月八日には織田信雄より黒印を賜っており、開基となっている⁶。その位牌は、

（表）當寺開基德源院殿特進儀同三司

実厳常真大居士

(裏) 正二位内大臣伊勢国司信長公二男

織田信雄公

寛永七 庚午 年四月三十日死去

とある。

昭和二十年五月十七日の戦災で伽藍が焼失したため、二十世米本昭心は開山大洋の木像と位牌を新しく安置したが、これは大洋が伝法開山の禅養寺(名古屋市中村区烏森町)の木像にならって作られた。なお、極楽寺は万治元年(一六五八)に無量山長禅寺と改号している。

大洋は禅養寺の伝法開山でもある。禅養寺は明応五年(一四九六)に悦山慶忻(天文二年(一五三三)十二月九日示寂)が開基となっており、永禄年中(一五五八―一六九)に兵火に罹って堂宇を焼失し寺領も没収された。そのため仮堂を建立して本尊を安置した後、文禄年中(一五九二―九五)に鬼頭内匠義直が伽藍を再興して中興開基となった。また、延宝年中(一六七三―一八〇)に副田勘左衛門が伽藍を再興しており、中興開山に岳室宝積(宝永四年(一七〇七)八月二十六日示寂)を迎えた。副田勘左衛門の女が尾

興隆期の法持寺について(川口)

張二代藩主徳川光友の子松平出雲守に嫁ぎ、生れたのが徳雲院殿心月電光大童子であった。しかし、延宝六年(一六七八)八月二十三日に早逝したため、禅養寺で葬儀を行っている。⁷⁾

中興開山岳室宝積と大洋宗呑との関係は明らかにならないが、大洋かその弟子の法を嗣いだところから伝法開山に勧請したのではなからうか。

ところで、大洋が法持寺住持であった元和年間(一六一五―一三)には法持寺が火災に罹った。その月日、被災の規模などは不詳であるが、高見葉師堂も焼失している。⁸⁾しかし、七世嫩桂祖林が元和七年(一六二一)に円通寺代住として普濟寺に輪住しているところから、それ以前に罹災したのではなからうか。

現在存在しないが、戦前の法持寺にあった大洋の卵塔には、

寛永九 壬戌 曆

○當山中興大洋呑大和尚

正月初五日呑養敬白¹⁰⁾

とあり、示寂後に弟子の呑養が記したもので「中興」号が

興隆期の法持寺について（川口）

付されていた。中興となった詳しい理由は明らかでないが、おそらく罹災にあつた後、伽藍などを復興した功績により贈られたものではなからうか。しかし、現在の回向草紙の歴住には大洋が中興とはなっていない。また、その後の行歴は明らかでない。禅養寺の位牌には、

（表） 法持六世當寺開法大洋吞大和尚禪師

（裏） 寛永九^壬 申年正月五日

九十六歳示寂

とあり、寛永九年（一六三二）正月五日に九十六歳で示寂しているところから長寿であつたことが明らかになる。

（1） 宝昌寺文書整理番号一七四の「由緒書」に

其後天正十八年二開祖遷化シ玉ヒ副住大洋宗吞和尚ハ

法持寺エ移転シ信長公落城ノ砌リ……

とあることから明らかになる。

（2） 鐘銘には方（万）覚義恩となつているが、正眼寺の「歴代住山記」では天沢義恩となつている。

（3） 鐘銘は『愛知県金石文集』上（昭和十七年七月 愛知県教育会）六頁にあげている。

（4） 『円通現住記及栄山略考』（円通寺蔵）に

法持寺 自二代維玄和尚代々本山輪次住相勉^{（てん）}六世大洋

吞和尚本山住及大本山普濟寺住共被相勉也^{（ニヤム）}

とある。

（5） 中村元勝については拙著『明治期以後の法持寺史』（平成十六年十月 白鳥山法持寺）二二二頁に詳しく述べておいた。

（6） 『尾張洵行記』（四）の長禅寺項（『名古屋叢書続編』第七卷 昭和四十三年九月 名古屋市教育局委員会）十八頁、『富田町史』（昭和三十一年七月 富田町史編纂委員会）五十七頁に由緒が記されている。

（7） 禅養寺の歴史は『尾張洵行記』（一）の禅養寺項（『名古屋叢書続編』第四卷 昭和三十九年十一月 名古屋市教育局委員会）一三四頁、『尾張志』上（昭和四十四年九月 歴史図書社）六三八頁、横地清『中村区の歴史』（昭和五十八年十二月 愛知県郷土資料刊行会）一四四頁、『中村区誌』（昭和六十二年十月 中村区制施行50周年記念事業実行委員会）三一二頁に紹介されている。

（8） 長谷川彦吉『名府回祿志』（昭和十三年十二月 磊々居）三頁、『名古屋の火災記録集成』（昭和四十八年十月 名古屋市消防局総務部人事教養課）二頁にあげている。

（9） 『張州雑志』巻第五十六の法持寺項にある高見葉師の縁起という。

（10） 『碑叢』（四）（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）に記してある。

七世 嫩桂祖林

五世春沢祖豊の伝記で明らかになつたように、嫩桂は浅井盛親の子で、春沢の又従兄弟にあたる。「春沢讓状控」によれば、天正十三年（一五八五）九月には塔頭の三笑軒に住持しており、春沢より田や畠などを譲り受けている。⁽¹⁾

法持寺七世となつた年次は明らかにならないが、慶長三年（一五九八）十月二十一日に正眼寺の天沢義恩の計らいで具えた鐘の銘には當住となつてゐる。しかし、当時住持であつたかを裏付ける資料はないため明確でない。

元和七年（一六二一）七月には円通寺の代住として普濟寺へ輪住した。⁽²⁾ また、同年には龍源寺（愛知県海部郡大治町）の法地開山にも迎えられている。龍源寺の草創開基は天文元年（一五三二）三月二十七日に亡くなつた桃岳宗見居士で、その末裔の吉田不説の父（快応心悅居士、天和元年（一六八一）十二月二十五日没）が中興開基となつてゐる。⁽³⁾ そのため二世禅室雲智（貞享三年（一六八六）二月十五日示寂）によつて嫩桂は勧請されたのではなからうか。その間の事情は不詳である。

興隆期の法持寺について（川口）

龍源寺の近くにある東光寺（愛知県海部郡大治町）の日牌過去帳の「七日」に、嫩桂のことが記されている。それには、

法持七世嫩桂祖林大和尚

當村佐之右エ門妻、平右
エ門養子娘、平左エ門
娘実父ナリ

とあり、嫩桂は東光寺の所在する堀之内村の佐之右エ門の妻、平右エ門の養子娘、平左エ門の娘の実父である。したがつて、熱田の浅井家出身の嫩桂は、出家前に三人の娘がいたことになる。しかし、その関係は明確でない。

元和（一六一五―二三）から寛永（一六二四―四三）の初め頃、春養寺（名古屋市熱田区旗屋町）の草創開山となつた。春養寺は、真言宗の喜見寺（名古屋市熱田区神宮）の六坊の一つ春養院を祥光荷公（寛永十四年（一六三七）十二月三日寂）が現在地へ移転再興して曹洞宗に改めた寺院である。嫩桂はその草創開山に迎えられ、寛永三年（一六二六）に法持寺より春養寺へ隱棲した。⁽⁴⁾ 本尊大日如来坐像は「熱田之記」によれば、

嫩桂和尚夢想ノ事有テ白鳥山境内ヨリ仏ノ御頭ヲ掘出

セリ再興而本尊トス⁽⁵⁾

とあり、法持寺境内より掘り出された仏頭といつてゐる。その後、寛永九年（一六三二）八月七日に示寂した。

興隆期の法持寺について（川口）

(1) 「春沢讓状控」は鳥居和之「熱田浅井家資料」（平成十一年三月「名古屋市博物館研究紀要」第二十二卷）十八頁に翻刻されている。

(2) 普濟寺の「前任牒」には、
誓海派 前住當山法持七世嫩桂祖林 住
同八壬戌年

(3) 『尾張徇行記』（四）の龍源寺項（名古屋叢書続編）第七卷 昭和四十三年九月 名古屋市教育局委員会 二〇九頁、『大治町史』（昭和五十四年十二月 大治町役場）四七〇頁の龍源寺由緒にいう。

(4) 『尾張徇行記』（二）の春養寺項（名古屋叢書続編）第四卷 昭和三十三年十一月 名古屋市教育局委員会 二〇七頁、『名古屋市史』社寺編（大正四年七月 名古屋市役所）六五九頁にいう。

(5) 「熱田之記」（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）一一一頁の「春養寺在幡屋」にいう。

九世 大通快道

大通快道が法持寺九世となった年月日は不詳であるが、

おそらく先住月峰慶呑の示寂した承応四年（一六五五）頃かと思われる。

大通は空雲寺（名古屋市中川区中島新町）の草創開山で、空雲寺の位牌には、

（表）法持九世當山草創大通快道大和尚禪師

（裏）延宝五巳正月十六日

とあり、墓碑銘には、

（表）法持九世當寺開山大通道大和尚禪師

（裏）延宝五丁巳歲正月十六日

とある。

空雲寺は所蔵する『年回早繰帳』の冒頭にある「當山由緒」や『年中行事當寺來歴簿』の「當山來歴」、開山堂の聯などによれば、寛文元年（一六六一）六月十五日に春日井郡大留村（現在、春日井市大留町）にあった善（禪）源寺の寺号を譲り受けて、鬼頭景義が開基となり大通を開山に迎えて開かれた。

開基の鬼頭景義は、江戸初期に出た希代の新田開発王といわれ、寛永八年（一六三一）から明暦三年（一六五七）までの二十六年間に海東、海西、愛知、知多、春日井の旧

尾張五郡と美濃の安八郡の合せて二十七カ村、約三千八百町歩、石高にして二万二千石の新田を開発した。木津用水や萱津用水なども開いており、これらの功績は計り知れない程大きく、尾張藩より苗字帯刀を許されている。

寛文十一年（一六七二）九月、黄檗宗の万福寺二世木庵性瑠が江戸からの帰途、剃髪を受けて空雲の戒名を得た。

延宝四年（一六七六）七月十五日に亡くなっており、開山堂に安置されている景義の木像の位牌には、

（表）當寺開基道龍空雲上座

（裏）延宝四_丙辰七月

とある。なお、厨子の右扉には、

鬼頭吉兵衛源景義法諱道龍空雲首座 延宝第四_丙辰歲

七月十五日示寂

とあり、左扉には、

維時文化四_丁卯年仲冬空雲五世孫鬼頭吉兵衛源義民厨子及斗帳謹重修焉

とあって、文化四年（一八〇七）十一月に景義より五代後の義民が厨子と斗帳を修理していることが明らかになる。

大通の後住には、法持寺十世海岸義雲が就いた。位牌に、

興隆期の法持寺について（川口）

（表）法持十世當寺二代中興海岸義雲大和尚禪師
（裏）元祿五_壬申秋九月十五日

とあり、墓碑銘も同じである。「二代中興」となっているが、その経緯は明らかにならない。開山堂の聯や「當山由緒」などによれば、寛文元年（一六六一）に開創されて以来、五十年後には伽藍が大破した。そのため掛搭していた大超義円長老は鬼頭兵内（景義三男）、同勘兵衛（同二男）、同十良右門（同四男）、同平六良、同市太良らの助力を得て享保十二年（一七二七）四月十二日に再建した。

大超義円長老は、「當山來歴」によれば三代目とあり、四代目は牧堂祖牛首座、五代目は大柔孝倫首座と続いている。しかし、二代は海岸義雲でなく鉄叟单清首座となっており、当時の空雲寺は平僧地であった。その関係を図示してみると、

草創開山 大通快道（一六七）——草創二代 海岸義雲（一六九）——二代 鉄叟单清——三代 大超義円（一七〇）——四代 牧堂祖牛（一七六）——五代 大柔孝倫（一七六）

となる。そのため海岸は空雲寺の開創にあたり、本師の法

興隆期の法持寺について（川口）

持寺住持であつた大通を迎えた。実際は海岸が草創に尽力していたと思われ、自らは二代となり、後に中興号が贈られたのではなからうか。なお、空雲寺は法持寺十五世督宗淳童を請して法地となつている。

『円通現住記及末山略考』の円通寺六代「玉葉和尚」の項には、

右円通寺玉葉和尚寛文十年ニ進院後末山三寺ノ住持ハ

法持寺快道和尚勢州篠嶋ヨリ来儀 法持寺ニテ老年隱遁遷化

医王寺 碧峯和尚 是ハ玉葉ノ弟子分ナリ 常安寺

万峯和尚

とあり、玉葉が円通寺に進院した寛文十年（一六七〇）頃の法持寺住持は大通であつたことが明らかになる。さらに大通は伊勢領であつた篠嶋から来たようで、晩年は法持寺において遷化した。

遷化の年次は延宝五年（二六七七）であるが、空雲寺の位牌、墓碑銘、過去帳（『年回早繰帳』）によれば正月十六日とある。しかし、法持寺蔵の『毎日靈供鑑』や成福寺蔵の「法持寺世代示寂年月日」には、示寂日が九月十六日となつている。

（一） 鬼頭景義については『新編愛知県偉人伝』（昭和五十四年九月再復刻 愛知県郷土資料刊行会 二六八頁、長谷川徳元編『道龍山空雲寺』、水野時二『心にのこる東海の人』（平成三年三月 名古屋鉄道株式会社 一八頁、「ウエルぱぼす」第三十七号（平成十三年四月 中日メディアアブレーション）所収の「史跡めぐり」空雲寺）などを参照した。

十世 海岸義雲

海岸義雲が法持寺住持に就いた年次は明らかにならない。『円通現住記及末山略考』によれば、寛文十年（一六七〇）に九世大通快道が住持であつたと思われ、大通は延宝五年（一六七七）に示寂しているところから、その間に住持したのではなからうか。大通が開創した空雲寺の二世にも就いており、空雲寺過去帳によれば、

元禄五壬申年

當山中興二世海岸義雲大和尚 九月十五日 當寺二世とあり、位牌、墓碑銘も同じ二世中興となつている。

開山地林泉寺（京都府船井郡八木町）は播磨の守護職に任ぜられた赤松則村の子孫であつた益則が創建した寺で、

初め菩提山観音寺と称した。益則は僧となり、寺門経営に専念し赤松家の菩提を弔った。延宝年中（二六七三―八〇）には雄峰益英、賢安衆により海岸を勧請して開山に迎え、清涼山林泉寺と改称し法持寺の末寺となった。^{〔1〕}

林泉寺の過去帳には、

開山海岸義雲大和尚 元禄五年 法持十世
九月十五日 當寺勧請

とあり、勧請されたことがわかる。勧請した益英、賢安については、

重創雄峯益英大和尚 宝永四年
十一月廿三日

前任賢安衆大和尚 延宝二年
十月一日

とあり、続いて

前任高岩清大和尚 正徳六年
二月四日

とあり、高岩も関係していたと思われる。また、益英と高岩の墓塔には、

〔表〕 重創塔

〔裏〕 號雄峰諱益英

〔表〕 高崑和尚

〔裏〕 元禄十三年二月廿九日

興隆期の法持寺について（川口）

とある。したがって、益英が中心となり海岸を勧請して再興したものと考えられる。そのため益英に重創号が贈られたのではなからうか。もちろん賢安衆、高岩も協力したものと考えられ、前任号を贈り墓塔も建立されたと思われる。

林泉寺二世は法持寺十二世弘海義全であるが、おそらく

弘海も勧請されたのではなからうか。林泉寺の過去帳には、

二世弘海義全大和尚 享保十二年
十一月四日

とあり、墓塔は、

〔表〕 二代塙

〔裏〕 號弘海諱義全

享保十二霜月四日化

とある。林泉寺における行歴は明らかにならないが、雄峰益英、賢安衆、高岩らと法持寺の海岸義雲、弘海義全との間に何らかの関係があり、勧請されたのではなからうか。

『張州雜志』卷第五十六及び『張州志略三』によれば、法持寺本堂の「白鳥山」の山号額は東臯心越（一六三九―九六）の揮毫という。心越は明からの渡来僧で、曹洞宗寿昌派の祖と称された。延宝五年（一六七七）に来日し天和元年（一六八一）に長崎を立って江戸へ行き徳川光圀の奏請

興隆期の法持寺について（川口）

よって水戸の天徳寺（後に祇園寺と改称）に住持した。⁽²⁾心越が江戸へ向う途中の延宝から天和年間頃に揮毫されたものと考えられ、海岸の法持寺時代であろう。

海岸は元禄五年（一六九二）九月十五日に示寂した。ただし、成福寺蔵の「法持寺世代示寂年月日」では元禄三年（一六九〇）九月十五日となっている。

（1） 林泉寺の由緒は『八木町寺院誌』（昭和五十八年十一月八木町教育委員会）七十九頁以後による。

（2） 心越の伝記は浅野斧山『東臯全集』（明治四十四年六月一喝社）、杉村英治『望郷の詩僧 東臯心越』（平成元年三月 三樹書房）によった。

十一世 悦堂愚禪

悦堂愚禪の住持日及び示寂年月日は不詳である。しかし、法持寺二十八世鼎三即一が二十三世證応道契との祥月忌供養を行った香語に、

白鳥十一世悦堂愚禪。廿三世證応道契。二和尚忌。證契師資意自通。一堂禪悦味無窮。春心二月兼三月。

遠近高低趣一同。唳。没波白鳥浮波日。始識吾門一世雄。^{三月廿九日正忌。二月取越。}

とあるため、三月二十九日が命日と思われる。

悦堂の住持していた年次を知ることのできる石燈籠が法持寺境内にある。その銘には、

茲有沢玄者三笑軒先住持也。先是誦誦法華三十三年其間不知幾千部也。遂伸供養刻石觀音像立于庭中。所施者波崎氏正次也。重誦誦法華一千部。其間凡七年。先施主波崎氏木村氏今年又立石燈臺立于觀音像前故誦誦之功其施主之信同書而以錄來鑑。

于時元禄七^申年夷則吉日

蓬萊宮畔白鳥山法持禪悦堂謹誌

とあり、元禄七年（一六九四）七月に法持寺住持として銘を誌している。

それには塔頭の三笑軒先住の沢玄が『法華経』を三十三年間誦誦し石造觀音像を彫刻して庭中に立てた。施主は波崎氏であったが七年後の本年、波崎氏と木村氏によって觀音像の前に石燈臺が建てられたという。なお、この觀音像は現在も法持寺境内に祀られている。

法持寺の薬師如来すなわち高見薬師は、元禄年間（一六八八一—一七〇四）に悦堂が堂宇を建立して祀ったといわれる。⁽²⁾『張州雜志』巻第五十六によれば弘法大師所造とあるが、元禄十二年（一六九九）四月八日に堂主の一番が記した縁起には、

堂一宇 南面（法）持寺門外安（薬師如来）座像長二尺

扁額高見薬師 四字筆

者不詳

弘法所造

縁起曰相伝此像旧在三州佐久之嶋元禄年中祝融之災罹（カケレリ）堂及像忽堂主驚悸而投像於海中其像為海潮所漂出于此处三勝兒童爭取弄之如傀儡然俄而失狂嗜爰有石橋氏者知其靈像怖畏營（ウツ）堂安焉當時將謂弘法大師之彫刻故奏之有司尔来佐久之嶋漁人每歲詣于此堂今堂主一番問夫蹤曰答曰相伝利修仙人之作而鳳来薬師同木同刻也於此始知嚮所奏弘法大師之造者果是謬訛也

于（マ）元禄十三年己卯夏四月仏生日堂主一番識

とあり、元は三河の佐久之島にあったものである。それが元禄年中（一六一五—二四）に祀つてある御堂が火災にあつ

興隆期の法持寺について（川口）

ため、堂主は驚き薬師如来像を海中に投じた。それが流れて熱田に着き、子供たちがもて遊んでいたが、石橋氏は霊像であることを知り、御堂を建立した。当時は弘法大師の彫刻といわれ官吏に届けた。それ以来、佐久之島の漁人が毎年、この堂に参詣しており、今の堂主の一番に像の伝承をたずねると、利修仙人の作で三河鳳来寺の薬師像と木同刻と答えている。これにより初めて縁起を知ることができ、弘法大師所造説は謬りであった。

このように薬師堂は、元禄十二年の悦堂住持時代に造られたとみられるが、一説によれば、十五世督宗淳童が薬師像に心願して大病が平癒し、その後霊験あらたかによつて信者が多くなつたとする説もある。なお、同年七月十日には法持寺本尊の延命地藏菩薩像の浄鏡と輪光が寄進されている。輪光の左右横に「元禄十二 七月十日」とあり、表には「輪光ハ大光ノ察心寄進」、裏には「カ、ミハ貞光施之」と彫られている。輪光は大光院（名古屋市中区大須）九世逸堂察心より寄進されたもので、鏡は貞光が寄進している。貞光については不詳である。

何れにしても元禄年間悦堂の住持時代とみられる。

興隆期の法持寺について（川口）

- (1) 鼎三即一の語録『天籟餘韻』にある。
- (2) 川口高明「白鳥山法持寺」の葉の「高見薬師如来座像」にいう。この説は戦前に書かれた高見薬師如来の由緒からとられている。
- (3) この縁起は「元禄十三年己卯」に堂主の一番が識したとあるが、十三年の干支は庚辰で、十二年が己卯のため、十二年説をとった。
- (4) 戦後に印刷された法持寺の「医王薬師如来の葉」にいう説である。

十二世 弘海義全

弘海義全の法持寺住持期間は明らかにならない。十一世悦堂愚禪の項でみたように、法持寺の本尊延命地藏菩薩像の輪光は、銘によると元禄十二年（一六九九）七月十日に大光院九世逸堂察心からの寄進である。逸堂と法持寺との関係は不詳であるが、弘海の歴住地成福寺（名古屋市中区瑠璃光町）は逸堂が五世、弘海は六世となっている。そのため逸堂と弘海は何らかの関係があったものと考えられ、逸堂が大光院へ昇住した後、弘海が成福寺に住持し、続い

て法持寺へ昇住した時、輪光を寄進したものでなからうか。そのため元禄十二年は弘海が法持寺住持であったと考えられる。

そうすると十一世悦堂の住持期間は元禄十一年までとみられるが、確かなことは明らかにならない。

次に弘海の他の歴住地をながめてみよう。「稿本藩士名寄——寺院ノ部——」（名古屋市蓬左文庫蔵）大光院項によれば、天和二年（一六八二）に朝宗智恩が大光院八世に住持しており、その後に逸堂が九世住持になった。逸堂は宝永元年（一七〇四）九月六日に万松寺（名古屋市中区大須）へ昇住しているため、その間に大光院へ住持した。法持寺本尊の輪光の銘から、元禄十二年（一六九九）には大光院住持であったため、天和二年（一六八二）から元禄十二年（一六九九）の間に大光院へ昇住したのである。したがって、その間が弘海の成福寺時代と考えられる。

林泉寺（京都府船井郡八木町）二世にもなっており、林泉寺の過去帳には、

二世弘海義全大和尚 享保十二年十一月四日

とあり、墓塔は、

(表) 二代埡

(裏) 號弘海諱義全

享保十二霜月四日化

とある。林泉寺は十世海岸義雲の項でみたように、延宝年間(一六七三—一八〇)に雄峯益英、賢安衆らが海岸義雲を開山に勧請しており、弘海も勧請であったであろう。⁽¹⁾何れにしても雄峯益英(宝永四年(一七〇七)十一月二十三日示寂)、賢安衆(延宝三年(一六七五)十月一日示寂)よりも後に示寂しているところから、墓塔は後世の人によって建立されたのであろう。

東昌寺(愛知県海部郡大治町)の開山でもある。『尾張御行記』(四)に、

一東昌寺 府志ニナシ○覚書ニ熱田法持寺末寺東正庵寺内年貢地○當寺書上ニ境内六畝歩村除、此寺草創年曆不伝、中興開山ハ享保十二末年本寺熱田法持寺十二世義全和尚也、昔ハ東照庵ト号セシカ同年東昌庵ト改号セリ、号法光山曹洞宗ナリ

とあり、草創年次は不詳であるが、享保十二年(一七二七)に東照庵より東昌庵と改号して中興した。⁽²⁾

興隆期の法持寺について(川口)

弘海は同年十一月四日に示寂した。行年は不詳である。法嗣には光正院十一世、善篤寺十世、大光院十二世、万松寺十七世に就いた百津吾拙⁽³⁾がいる。

(1) 林泉寺の由緒は『八木町寺院誌』(昭和五十八年十一月八木町教育委員会)七十九頁以後による。

(2) 『尾張御行記』(四)の東昌寺項(『名古屋叢書統編』第七卷 昭和四十三年九月 名古屋市教育委員会)二二〇頁、『大治町史』(昭和五十四年十二月 大治町役場)四七二頁の東昌寺由緒にいう。

(3) 百津吾拙については拙稿「百津吾拙と一山元浄の伝記」(平成六年三月「愛知学院大学禅研究所紀要」第二十二号)で伝記をあげておいた。

十三世 輪山東叡

輪山東叡が住持した年次は明らかにならないが、禅林寺(二宮市大字浅野)五世より転住したと思われる。禅林寺は元天台宗で、花谷榮和尚の開基である。小野院極楽寺と称していたが、大永五年(一五二五)に正眼寺(小牧市三ツ淵)八世宣叟曇周が曹洞宗として再興した。正保五年(一

興隆期の法持寺について（川口）

六四八）に仙境山禅林寺と改号し、元禄二年（一六八九）には久岩伝昌によって法地再興されている。

境内にある薬師堂の本尊薬師如来木像坐像の裳先裏には、

万人講之助力以再興尊像也 元禄九年丙子八月吉日

當山現住実穂代 名古屋本町四丁目仏師半九良 万人

講願主寺沢弥兵衛 川口次平 芝崎権兵衛 同金十良

同善左右門

と記されており、元禄九年（一六九六）は四世智屋実穂が住持で、実穂は正徳二年（一七一二）十月十一日に示寂した。禅林寺の過去帳によれば、六世大有義装は享保二年（一七一一）十二月十一日に亡くなった上の小七の娘（一超芳円信女）の祠堂金一分が「大有代」として納められているところから、正徳二年（一七一二）以後、享保二年（一七一一）頃までが輪山の禅林寺住持時代ではなからうか。その後、法持寺へ転住したのと思われる。位牌には、

（表） 勅請前永平當山五世輪山東叡大和尚禅師

（裏） 義桃代

とあり、永平寺に出世している。ただし、位牌は十七世再中興見隆義桃（慶応四年（一八六八）四月十六日示寂）代

に安置したものである。

輪山の法持寺時代の行歴は不詳であるが、禅林寺の過去帳によれば、元文三年（一七三三）五月十三日に示寂した。しかし、成福寺蔵の「法持寺世代示寂年月日」では同年五月十五日の示寂となっている。

（一） 禅林寺の由緒は『一宮市史』西成編（昭和二十八年九月一宮市教育委員会）三十五頁、四六〇頁、『青松山誌』（昭和五十三年五月 青松山正眼寺）四十二頁、鶴飼宏史「国の重要文化財禅林寺薬師如来由来」（禅林寺発行）などによって明らかにする。

十四世 義山淳孝

寛延四年（一七五二）四月、十五世督宗淳童による大鐘の銘には、

自物留孫仏造巨鐘、劫初輪王、鎔範金鐘以降、為法器之雄者、其惟鐘乎、當寺開山示寂後、百有余年、大鐘未成、為闕典也、粵本州春日井郡、清須灰原氏、求他旧鐘、寄附之、時維慶長四己亥冬十月也、爾来年所悠

久、而驚破声不遠震、聞者慄焉、依而當山十四世、義山和尚、雖有再範之志、衣資乏而不成、退隱後亦思而止、止而復思、幸當寺檀越、當所旗屋町、岡本氏清七郎、法名円相本清居士、其妻法名円通妙貞大姉、或日相伴訪隱室、談及鐘之事、檀信感發、而即喜捨淨財、就于梟氏家、而開大爐鞴、營橐籥之役、鐘既円成、拈日籊籊也、仰冀憑這功德力、捨財善信、見聞真俗、及情与非情、同証円通三昧、因請僦手山衲、為之銘文、乃掾歛嘉之筆、為之銘

厥銘曰

大白鐵漢 無舌吐詮 詮詮妙韻 徧応大千
警覺鬼畜 雲集聖賢 緩説五位 急唱三玄
叶音教体 清浄本然 円通福寿 累劫貞堅
全域功德 為浄邦蓮 簾蓬菜下 祝宝祚年
皆寛延第四龍次辛未孟夏十有五真
尾陽愛知郡熱田宮

白鳥山法持禪寺幻寄淳董謹誌

願主 十四世義山孝和尚

冶工

興隆期の法持寺について（川口）

水野太郎左衛門

藤原孝政

とあり、義山は大鐘を再範する志があつたものの建立できず、法持寺退隱後も再範を願っていた。

この銘から寛延四年には義山が法持寺を退隱していたものと思われる。それ以前の享保八年（一七二三）八月には、正法寺（愛知県海部郡甚目寺町）の喚鐘の銘を、

夫鐘之為器法器之長而能警晨昏能齊進止不 抜幽冥苦
驚長夢其夢其功德不可思議矣本州春日井郡小田井莊二
杖村佐吉嘗喜捨淨財鑄半鐘掛於堂前之鳴仏事或歲地大
震鐘墜於堂而彩敲破不勝施号令山野憾之傾衣鉢余以再
範焉啓迪禪誦利樂祥生兼為蕪鐘檀主法名是山静如信士
資助冥福莊嚴報地者也

厥銘曰

小形蓮鯨 不入海中 淹神堂上 震吼無窮 齊呼諸聖
普利群蒙 先誦吐月 報禪斯風 声雖不大 功敲洪鐘
敲妙心秘 鳴正法隆 毀々教体 刹々円通

尾州海東郡萱津村 正法禪寺幻寄 義山孝謹誌

享保八竜信癸卯仲秋 上澁日

興隆期の法持寺について（川口）

尾州名古屋鍋屋町

冶工

水野太郎左衛門藤原孝政^②

と記しており、当時は正法寺八世であった。

したがって、享保九年（一七二四）から寛延三年（一七五〇）までの間に法持寺十四世に就いたものと考えられるが、明確な年次を決めることはできない。また、吉田清左衛門（安永六年（一七七七）正月二十八日没）が中興開基となっている香樹院の法地開山にもなったが、その年次は明らかにならない。香樹院は天明五年（一七八五）十月二十四日に大運寺（名古屋市瑞穂区十六町）と改名した。^③ 義山は宝暦七年（一七五七）三月六日に示寂しているが、その行年は不詳である。

（1） 督宗淳童の大鐘銘は『愛知県金石文集』上（昭和十七年

七月 愛知県教育会）一四九頁にあげている。

（2） 正法寺の喚鐘銘は『甚目寺町史』（昭和五十年三月 愛知県海部郡甚目寺町）五七八頁にあげている。

（3） 大運寺については『名古屋市史』社寺編（大正四年七月名古屋市役所）六〇一頁にいう。